明日のために

NO.1（創刊号）
1970年6月1日発行
ノンセクト・ラディカル・グループ編集

理工学部の全ての学友諸君！学校も所に、ていや、六月を迎え、私が日々学問に入ろうとするウォッチャッツ体制粉砕闘争に対して、今月中旬より本格的なロックアウトを打ちおろうとしている。五月二十五日以降にもその説明もなく、明日は部分的により臨時休校としようとしている。一般でロックアウトとしたとき、この様な学校側の不当な動きに対して、我々は何を学び、学校が休みになるということは、つまり学校側に問題は年校のいいなりになるばかりでなくていいのだろうか。まさに我々は学校を奪われ、圧力により、何もしないという陰湿な行為によって自分自身を閉じ込めてしまうのである。学校、帰ってから蛇を踏んでいるようなものである。学校側の理不尽な行為を黙認したければ、学生諸君を迷わせないというこの現状を前にはおしく感じられたりしたり、とと我々は、主体を取り戻して、住み慣れた所に向けなければならないし、そしてまた自分自身を確かめなければいけないのではないだろうか。今後予定されている、更、今までにもなされてきたロックアウトに対しても、我々は、どれにはをはめ持つ事実というものを自分自身の問題として持続的に考えるなら、ますと、自分自身のとる行動は決定されるであろう。

サークル室の開放を!!

さて、それと同時に、前年頃以前よりの問題として、サークル室のロックアウトの問題がある。我々が自主的に研究しようとすれば、又、わくの問題に取り組もうとすれば、その場合学校側は不当で思いなる学生諸諸の動物が、限られた条件に応じようとしているが、わいわいさいとも関係にいうとしてしまう様につぶしになってくる。そのような無理なる反抗として学生がなすべきわきまえ、ことを成っていくと、その動機はなくなる。一人くらいしまっていこうとはしないのだ。学生にこう言わせるのである学校事務の時間をたかが知る、誤りは、明白にして行いとはいはない。

サークルに入って、この様なことが本来の学生生活

学生にとってはそれらの問題はまってうんうんうこ
ふかはかりのしいとさないがに問題なっやとも
オ学生活を学校
ふれるもの問題、学生すべ
自様に対
サークルのロックアウトを学内のロックアウトとはとりもなおさず、学生の自治、学生の自主性を奪うものである。学校側の不当な行為を黙認すれば、学生諸君は学校側の仲間の問題をまさに自分の問題として、ともに、共に連帯することこそが、我々は共通の問題として、又、同時に、学校側の学生諸君の大学生活の大学生諸君とされるであろう。

土木工学講座に続こう!!

さて、全ての理工学部の学友諸君！やかる現状のなかで、土木工学講座実行委員の学友が、学校当局による講座予定の教室ロックアウトを情況及び講師情況に対する学生にもかかわらず、皆四名の学生後の学生を配置し、既によるある土木講座を開講してきた。まさに実行委員会の学生は、この様な講座を通して集合の自主を勝ちとり、理工学部内講座を通して学校との連帯を深めようとしている。学部・化学部・化学校との連帯を深めようとしている。我々も、この実行委員に続き、現在の機械工学及び科学者や建築学などの問題を各学科における自主講座を通して学びとり、又、自然科学問題をクラス討論するなどして自分の問題として感じとり、現在のこの様な事態から脱出するにしている日々にたいして、我々は自主的に学生諸君の問題に出来ることはないか。各学生諸君の学生方を学生にも。又、深かしい我々の明日の為にも、明日は明日の為にあるのではなく、又、昨日の為にあるのでもない。学生は今日の為にあるのである。

君、過ぎし日に何をなせし
君、今ここに唯ただ嘆く
悔いて、君、もも悔き所
何をなせし。——ヴェルレーヌ——